

羽生市の幼児教育の歴史

－幼稚園・保育所の開設に着目して－

The History of Early Childhood Education in Hanyu City － Focusing on the Establishment of Kindergartens and Nursery Schools －

平 井 厚 志
(こども学科 特任准教授)

要旨 本研究の目的は、羽生市の幼児教育、特に幼稚園及び保育園の歴史について開園の時期や開設者、開設に至った社会的ニーズ等について明らかにしようとしたものである。本研究は文献調査や開設者に関わりのある人々からの聞き取り調査によって進めた。本研究において、昭和初期から現在に至る約 90 年間の羽生市における幼稚園、保育園、認定こども園の開園や閉園、園種の変更時期などの歴史や当時の園児の活動の様子が明らかになった。調査研究を進める中で、認可外の園であったため、一切文献には登場しないが、多くの子どもが学んだ園も 4 園掘り起こすことができた。今回の結果をもって、地元の幼児教育者養成校として、今後の本学の教育内容や学生の地元園への就職にも参考にすることができる。

【キーワード：羽生市 幼児教育 幼稚園 保育所】

I. はじめに

1. 羽生市の概要

羽生市は関東地方のほぼ中央、埼玉県北東部に位置し、都心から 60km 圏内に位置する。東と南は加須市、西は行田市、北は利根川を隔てて群馬県に隣接している。市域は東西 10.25km、南北 6.71km、面積 58.64 平方キロメートルで、人口は令和 2 年（2020）9 月 1 日現在 54,416 人である。古くからの農業地帯であるとともに藍の栽培が盛んで、武州藍染めの生産地であり、織物、衣料の町としての顔も持つ。近年は市内に東北自動車道羽生インターチェンジがあり、併せて国道 122 号と国道 125 号が通り、物流の利便性から工業団地も造成され、多くの企業や工場が進出している。

2. 研究目的

羽生市は、第 2 期「羽生市子ども・子育て支援事業計画（令和 2 年から令和 6 年）」を策定し、基本理念である「育つ楽しみ・育てる喜び みんなで共有できるまち 羽生」のもと、数々の施策を展開している。市内には令和 2 年（2020）5 月現在、私立幼稚園 2 園、公立保育所 5 園、私立保育園 2 園、認定こども園 4 園、認可外保育施設（事

業所内保育施設）1 所が設置してある。ちなみに保育所待機児童はいない。

話を転じて、本学は昭和 58 年（1983）に開学した羽生市内唯一の高等教育機関である。現在までに閉鎖した学科はあるが、今日設置している「こども学科」は保・教育分野で活躍できる人を育てることを目的とした、保育士・幼稚園教諭の養成校であり、開学以来一貫して幼児教育者の育成を行ってきた。

今回、本学の出身学生が市内の保育施設に就職することが多くなりつつあり、その歴史を認識させておく重要性を感じるとともに、幼児教育者養成校である立場から、羽生市における幼児教育の歴史を明らかにしようとするものである。

3. 研究方法

本研究は各種文献調査と関係者から聞き取り調査、及び実地調査を行い歴史を明らかにした。

II. 調査結果

1. 羽生市における幼児教育の始まり

ア. 私立羽生幼稚園開園（建福寺）

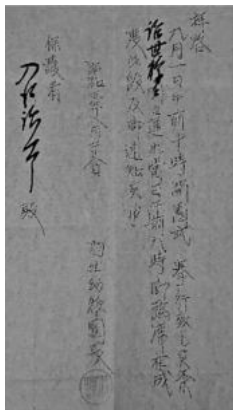
羽生市の幼児教育の始まりは、昭和 3 年（1928）5 月に、田山花袋の名作「田舎教師」の舞台となった古刹建福寺内に、建福寺第 24 世住

職の安野禪綱和尚が『羽生幼稚園』を開設したのが始まりである。

羽生町誌¹⁾によれば、『学齡ニ達セザル幼児ヲ保育シテ心身ヲ健全ニ発達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シ家庭教育ヲ補フヲ以テ目的』とし、昭和3年(1928)5月26日、埼玉県許可を受けて開設した。「園児は、満四歳以上学齡以下の定めで、保育年限は満二箇年、定員は四十人である。私立で、羽生市大字上羽生字小松道上千五百五十二番(建福寺内)にある。と記載され、保育のモットーとして次の4点が記されている。

- 1 健全ナル心身ノ發育ニ留意スル事
- 1 何事モ自發的ニ導ク事
- 1 快活デ共同性ニ富ム様導ク事
- 1 幼児ノ本性ヲ尊重スル事

開設の目的や保育のモットーは、現在の幼稚園や保育園でも掲げられていることである。



(開園式の案内 埼玉県立文書館蔵)

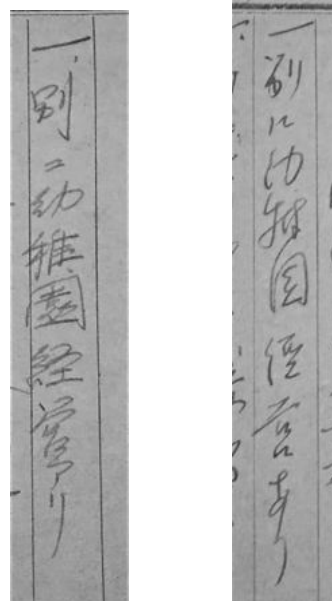
写真は、昭和3年(1928)9月1日に開園式を行う旨の8月28日付けの保護者宛案内文である。当時の県内の幼児教育の様子を見ると、羽生幼稚園開設の3年前の大正14年(1925)10月現在、県内には12の幼稚園²⁾しか存在せず、当時の浦和町や川越市、熊谷町や深谷町、秩父町や本庄町・加須市や鴻巣町等、県内各地区の町場であった。羽生市の近隣、旧北埼玉郡(羽生市・加須市・行田市)では、加須町立として子守学級から発展した託児所と幼稚園が存在している。行田市では、大正5年(1916)に私立忍幼稚園や私立亀山幼稚園の設置が県から認可されたが、すぐに閉園になった。このような中での幼稚園開園は、安野禪綱和尚の英断と時代を見通す目があったと思われる。開設当時の事を建福寺第26世住職の安野正樹和尚(現建福寺幼稚園長)に伺ったが、安野禪

綱和尚及び建福寺第25世安野正雄和尚から「地域に貢献する立場から、私財を投じて幼稚園を開設した」と伝え聞いているとのことであった。

イ. 羽生幼稚園が町立へ移管

昭和17年(1942)私立羽生幼稚園は町立に移管された。羽生市史³⁾によると、当時幼稚園に勤務した岡戸富貴さんの話として、「安野禪綱住職の奥様が病気になる、幼稚園を閉鎖したいとの話が起ったとき、これを聞いた羽生国民学校校長角田伊助先生が、金子町長に相談して、国民学校の2教室を使用して幼稚園を存続させることになった。机や腰掛・オルガン等は安野先生から提供され、すべり台やブランコなどは粗末であった。園児が200名近くいて4人の保母で保育にあたった。昭和20年以降は空襲が多くなり、満足以1日も保育をできなかった。終戦後進駐軍が校舎を使用するということで幼稚園は廃止になった。」とある。

町立幼稚園の痕跡を求め、羽生国民学校の歴史を受け継ぐ羽生市立北小学校の小峰由起子校長に御協力をいただき、いろいろ調べたが、太平洋戦争末期の混乱期で、画像は発見できなかった。ただ、学校沿革史の昭和18年(1943)、昭和19年(1944)の項目に、次の一文が掲載されており、幼稚園経営に関わっていたことが読み取れる。



(昭和18年・19年 学校沿革史 北小学校)

2. 農繁託児所

羽生幼稚園が存在していたころ、農村部では農繁期託児所が開設されていた。農繁期託児所は明

治・大正期から少しずつ開設されてきたが、政策的に力が入られ本格的に設置されたのは昭和になってからである。太平洋戦争中の昭和 17 年（1942）5 月、埼玉県学務部長は各国民学校長及び各単位女子青年団長宛に「農繁期労力奉仕ニ関スル件」⁴⁾を発出し、その別紙において次のとおり農繁期保育所（託児所）について記している。

- 1 各学校ハ従来ノ通最農繁期ニ於テハ労力奉仕セラレタキコト
- 2 保育所（託児所）並共同炊事ノ開設ハ最近ノ農村労力不足ニ鑑ミ、特ニ政府ノ勸奨セル所ニシテ、各町村農会主体トナリ各所ニ開設セラルヽ見込ナルヲ以テ、進ンデ其の開設ニ協力シ、各学校職員ハ女子青年団員ト共ニ之ガ運営ニ当ルコト
- 3 保育所運営ニ関シ留意スベキ事項
 - 1 開設期間ハ最農繁期ニ於ケル臨時休業中ノ概ネ一週間トス
 - 2 開設ニ付テハ農会ト協議シ、必要個所ニ設置スルコト
- 3～4 省略
- 5 保育児童ノ衛生ニ関シテハ充分注意スルコト
- 6 保育所ニハ必ス監督者ヲ置クコト

この通知文から、農繁期保育所は最農繁期の学校臨時休業中の約 1 週間程度、必要な各場所に設置され、国民学校の教員と女子青年団員が指導に当たったことがわかる。

羽生市では、昭和 16 年（1941）夏季から神社の境内や集荷所を会場⁵⁾に農繁託児所が開設された。

昭和 17 年（1942）の井泉村（現羽生市井泉地区、昭和 29 年に羽生町と合併し羽生市となる）は、夏期農繁託児所を 6 月 24 日から 30 日までの 7 日間。秋期農繁託児所を 10 月 27 日から 11 月 2 日まで 7 日間開所し、2 歳から 6 歳までの幼児を保育した。開設時間は夏期が午前 7 時から 11 時 30 分。秋期が午前 7 時から午後 4 時であった。開設場所と出席者は表 2 に示す通りである。

井泉村は、明治 22 年（1889）に今泉村、発戸村、尾崎村、北袋村、藤井村上組、藤井村下組が合併して発足したが、農繁託児所はその村々で開設されていたことがわかる。埼玉県からの通知の通り各地区での開設であった。

表. 2 井泉村農繁託児所

開設場所	夏期託児所	秋期託児所
北袋集会所	11 人	8 人
藤井上組集会所	14 人	8 人
出尾集会所	10 人	7 人
藤井下組集会所	15 人	10 人
今泉出荷事務所	38 人	6 人
発戸明神社	20 人	14 人
尾崎明神社	14 人	10 人

羽生市史より作成

なお、農繁託児所は昭和 19 年（1944）の夏期まで開催されたが、秋期は 6 年生及び高等科の児童生徒の勤労奉仕のため開催されなかった。

Ⅲ 太平洋戦争終戦直後の幼児教育

ア. 田口幼稚園（北小学校前）

昭和 20 年（1945）の太平洋戦争の終戦を機に町立幼稚園は閉園となり、羽生市の幼児教育は一時途絶えた。そのような中、地域の保護者からの要望で、昭和 20 年 3 月まで羽生国民学校の訓導だった田口ユウ先生が、自宅を教場に「田口幼稚園」を開設した。御子息にお話を伺ったが、地域の方々の要望に応え私設の幼稚園を開設した。どの子どもたちにも平等に接し、さらに授業料も極めて廉価だったので、保護者からもう少し受け取ってくださいとの声もあったとのことである。また、あいうえおを教えたり、オルガンを購入して音楽も指導していた。運動は前の勤務校である羽生小学校（現北小学校）長から特別許可を受け、小学校で行っていた。小学校教諭の経験を生かし、きちんとした保育を行っていたとのことである。昭和 24 年（1949）に田口幼稚園に通っていた小野田氏に当時の話を伺った。当時の幼稚園は現在の北小学校のすぐ南側、堀を挟んで少し奥まったところにあった先生の自宅で、部屋と庭を使って活動を行った。時間は午前中だったように記憶している。同級生が 20 人ぐらいいた。雑誌「キンダーブック」があったのをよく覚えている。終戦直後に開園した田口幼稚園は、地域の方々の信頼を得てその後 20 年ほど保育を行った。最後の卒園生である三幣さんは、当時の思い出を現代の寺子屋のような感じだったと語る。ミカン箱の上に長板を渡して机にし、そこで折紙を行ったり絵を描いたりした。その絵は直接壁に貼ったという。また動物の形をした木の積木があり、人気があり取り合いになったと懐かしむ。先生の人柄と教育

内容で保護者の信頼を得ていた田口幼稚園は、昭和22年（1947）文部省が制定した「学校教育法」の中の幼稚園や昭和23年（1948）厚生省所管の「児童福祉法」施行による保育所の認可施設になる道を選ばず、昭和43年（1968）まで多くの人材を育て、その歴史に幕を閉じた。

IV 幼稚園・保育園の新設

第1期 昭和25年～昭和34年

ア. 新設の背景

終戦で町立幼稚園が閉園してから、田口幼稚園が市内の子どもの学びの場になっていたが、やがて戦後復興の中で多くの幼稚園や保育園が、昭和25年（1950）から昭和34年（1959）までの10年間にかけて開園した。開園年と園名、開設場所は表1に示す通りである。

表1 新設幼稚園と保育園

開園年	園名	場所
昭和25年	羽生幼稚園	中央2丁目
昭和25年	斉藤幼稚園	中央4丁目
昭和27年	増子幼稚園	東2丁目
昭和28年	町立保育所 32年～市立保育所	中央2丁目 中央1丁目
昭和28年	金久保幼稚園	北荻島
昭和29年	二葉幼稚園	喜右エ門新田
昭和30年	須影保育園	須影
昭和31年	木村保育園	中手子林 (昭和52年現在地)
昭和32年	市立第1保育所	中央1丁目
昭和33年	市立第2保育所 (千代田村立保育所)	下村君
	高田幼稚園	今泉
昭和34年	春山幼稚園	稲子

表1より、始めに私立幼稚園が開園し、町立保育所の開園を挟み私立幼稚園が開園された。その後、公・私立の保育園が開園し、その後再び幼稚園が開園したことがわかる。開園場所を見ると羽生市内の中央部から東部地区、北東部地区、南部地区にまたがり、近隣で重複した開園はない。この時期は戦後の復興期から高度経済成長期の初期にあたり、少しずつ経済が復興し生活にやや余裕が出てきたのと、昭和22年（1947）から昭和25年（1950）に出生数が極めて多いいわゆるベビーブームの子どもたちが幼稚園・保育園の入園適齢期になったことが開園に繋がったと考えられる。

表2は、昭和28年度版「羽生町町勢要覧」⁶⁾における昭和27年（1952）年7月1日現在の年令別男女別人口である。この表における人口は、昭和29年（1954年）9月に1町6村が合併して羽生市が誕生する以前の数なので、旧村名でいうと新郷村、須影村、岩瀬村、川俣村、井泉村、手子林村は含まれておらず、昭和34年（1959）に羽生市に編入れた千代田村を形成していた旧村君村、旧三田ヶ谷村も含まれていない。

表2 昭和27年7月の年令別人口

(13)											
年令別男女別人口 (昭和27年7月)											
年令	総数	男	女	年令	総数	男	女	年令	総数	男	女
0歳	232	126	106	17歳	277	125	152	34歳	155	69	86
1	277	140	137	18	206	81	125	35	152	68	84
2	299	156	143	19	245	110	135	36	171	73	98
3	355	178	177	20	220	110	110	37	166	80	86
4	368	179	189	21	222	102	120	38	174	80	94
5	365	186	179	22	186	81	105	39	155	66	89
6	218	97	121	23	188	87	101	40	160	79	81
7	264	137	127	24	201	94	107	41	160	69	91
8	303	142	161	25	200	86	114	42	156	69	87
9	300	134	166	26	198	88	110	43	134	71	63
10	309	150	159	27	193	92	101	44	142	64	78
11	293	144	149	28	174	75	99	45	139	75	64
12	242	117	125	29	175	76	99	46	85	47	48
13	221	106	115	30	174	78	96	47	121	54	67
14	227	105	122	31	161	62	99	48	104	58	46
15	267	134	133	32	149	48	101	49	114	55	59
16	317	145	172	33	148	66	82	50	122	75	47

国勢調査の年少人口である14歳以下の年齢別の人口を見ると、3歳児・4歳児・5歳児及び8歳・9歳・10歳児がそれぞれ300人台である。そのほかの各年齢別人口は200人台である。3歳児から5歳児はまさにベビーブーム時に誕生した子どもたちである。8歳児から10歳児は昭和17年（1942）から昭和19年（1944）の誕生であり、1941年（昭和16年）1月に閣議決定した「人口政策確立要綱」に基づく「結婚十訓」中の「十 生めよ育てよ国のため」が背景にあるため多いと考えられる。このベビーブームによる子ども数の増加が、この時期の幼稚園・保育園開園の大きな原動力になっている。

イ. 私立羽生幼稚園開設（内田錦子）

戦後の幼稚園開設は、昭和25年（1950）4月、内田錦子が戦前に存在した羽生幼稚園と同名の「私立羽生幼稚園」^{7) 8)}を、羽生市上羽生（現中央2丁目）、通称蓮ヶ原通りに面した自宅に開園したことで始まる。開園に至る経過等を御子息にお話を伺った。それによると、開園当時は「内田幼児塾」として開園した。内田錦子は県の幼稚園設

立の認可が出るまでは幼稚園を名乗らないと決め、県の講習会に参加して教諭資格を取得するとともに、施設整備を行い、昭和29年（1954）5月15日、県の認可を受けて正式に「羽生幼稚園」を名乗るに至った。昭和25年（1959）当時は自宅を教室に保育を行っていたが、認可に向けて施設を整備し、園舎の新築やピアノ等の備品を揃えていったとのことである。昭和28年（1953）に在籍した栃金氏に当時の話を伺ったところ、「民家の8畳2間に座り机があった。折紙をした記憶がある。庭に砂場やすべり台、鉄棒があった。卒園後数年して幼稚園が新しくなったということで招待された。行ってみると現代風の園舎やプールができていた」とのことである。御子息と栃金氏の話を勘案すると、内田錦子が「内田幼児塾から内田幼稚園・羽生幼稚園」へ認可に向けて、また認可後も施設や備品の充実を図っていったことが見て取れる。なお、羽生幼稚園は、昭和63年（1988）3月、園児数の減少を理由に40年近い歴史に幕を閉じた。

ウ. 斉藤幼稚園開設（斉藤新道）

羽生幼稚園が開設されたのと時を同じくして、現在の市民プラザ横（斉藤新道）に斉藤久香が斉藤幼稚園を開設した。ご息女の話によると、斉藤久香は南画を学び絵を得意としていた。このため近所の人々に「子どもに絵を教えて欲しい」と頼まれて、自宅で子どもたちに教え始めたのが開設の経緯とのことである。やがてオルガンを購入して音楽を指導したり、紙芝居を行うようになった。また保護者が庭に手作りすべり台を設置して、園の形が整えられた。行事として利根川への遠足（ご息女も同行）、卒園にあたってのお別れ会、言葉集（卒業文集）をガリ版刷りしたそうである。町場の子どもの幼児教育を支えた斉藤幼稚園であるが、その閉園は定かでなく、ご息女によると昭和28年（1953）度末ではなかったかということだが、今後の調査により確定したい。

エ. 羽生町立保育所の開設

羽生市史⁹⁾によると、昭和28年（1953）12月に、羽生町大字上羽生40番地に町立保育所を開設したとあり、満3歳から小学校就学前の幼児を預かったとある。昭和30年（1955）8月18日

発行の『羽生市広報』に「保育所にはいれる人」の記事が掲載されており、収容定員が30名で入園希望に応じかねていること、保育所入所希望者が増えているが、本来の保育に欠ける乳児・幼児を保育する目的で設置していることを理解せず、「近所の子どもが行っているから」とか「保育時間が長いから幼稚園より割が良い」といった理由で入園申請に来る人も見受けられる。と述べている。この状況を改善すべく、羽生市は保育所の改築工事に取り組み、昭和32年（1957）3月に現在の第1保育所所在地に新園舎を完成、4月5日に入所式が挙行された。定員も倍の60名とした。写真は、昭和32年度版市勢要覧に掲載されている開園直後の市立保育所である。また、羽生市広報には、昭和32年（1957）1月15日号で保育所改築費の予算が追加されたこと、同じく4月15日号には写真入りで入所式の記事が掲載されており、市民の関心の高さが伺うことができる。



（市勢要覧 昭和32年度版）（羽生市広報）から転写

町立保育所は市立保育所になり、現在の市立第1保育所に繋がっていくのである。

オ. 幼稚園・保育園の開設ラッシュ

羽生市史や埼玉県私立幼稚園協会「20周年記念誌」¹⁰⁾によると、それぞれの園は各地域の要望に応じて開園をしている。埼玉県私立幼稚園協会「20周年記念誌」から沿革や教育方針等を抜粋すると、昭和27年（1952）に増子ハツ子が羽生市東町に定員40名で「幼児の心身の調和的な発達を図り健全な心身の基礎を養うこと」を教育方針の第1に掲げ「増子幼稚園」を開設した。翌昭和28年（1953）1月、金久保久弥・八千代が市内北荻島に、隣接する加須市も含めて、近隣が農耕地域のため幼児教育環境に恵まれないこと、特に農繁

期の対応と保護者の教育熱の高まりに応える目的で「金久保幼稚園」を開園した。認可は翌昭和29年（1954）8月のことである。翌昭和29年（1954）には、元教員の塩原恵興が市内喜右工門新田の自宅を会場に「二葉幼稚園」を開園した。認可外であるが「二葉幼稚園」はやがて三田ヶ谷小学校の移転に伴い、三田ヶ谷小学校跡地に移転した。その後、その地に市立保育所建設の話が起こり、施設設備を新設の「市立第4保育所」に移管し、昭和40年（1965）3月、10年にわたり三田ヶ谷地区の幼児教育を支えた歴史に幕を閉じた。この話は、塩原恵興の御子息から伺ったものである。

幼稚園開設と同時に、私立の保育園の開園も始まった。埼玉県保育所総覧¹¹⁾によると、昭和30年（1955）5月に須影地区に「須影保育園」が、農業及び被服縫製を生業とする地域社会の強いニーズに応じて開園された。当初個人経営であったが昭和56年（1981）社会福祉事業に対する社会の要請を鑑み、運営を社会福祉法人に移行した。昭和30年（1955）に中手子林地区に「木村保育園」が開園した。認可は翌昭和31年（1956）4月1日である。たくましい身体と心豊かな子どもの育成を目標に、地域の協力を得て木村ふみを園長にして保育を行った。昭和52年（1977）に広い敷地と新園舎を建設し、現在地の上手子林に移転をした。

公立の保育所もこの時期開設された。昭和32年（1957）には中央1丁目に、昭和28年（1953）開設の羽生町立保育所が移転新築（改築扱い）され、市立保育所としてスタートした。現在の市立第1保育所である。翌33年（1958）には村君地区に千代田村立保育所（旧市立第2保育所）が開設された。

保育所の開設に続いて、昭和33年（1958）4月、高田連太郎が今泉地区に「高田幼稚園」を、昭和34年（1959）春山よしが稲子地区に「春山幼稚園」を開園した（認可は昭和42年3月）。両園とも近隣に幼稚園も保育所も存在せず、地域住民の要望に応えての開園であった。

カ. 昭和20年代の農繁託児所

常設の幼稚園や保育所が徐々に開設されていく中で、農繁期の臨時託児所の開設も見られた。太

平洋戦争期の農繁託児所については前述したが、戦後も農繁期に季節託児所が開催された。写真は昭和20年代（1950）後半の岩瀬第1託児所の絵はがきである。インデックスが岩瀬村と記されていることから、羽生町と合併して羽生市が誕生した昭和29年（1954）9月以前の託児所風景である。



（市制施行65周年記念「懐かしい羽生市」の写真から転用）

このような季節託児所は、昭和30年代に入って常設の保育所や幼稚園が開設されたため、徐々に姿を消していった。

第2期 昭和38年～昭和48年

昭和34年（1959）の春山幼稚園開設以降、保育園も幼稚園も新規の開設がなかったが、昭和38年（1963）から昭和48年（1973）にかけて、8園が開園した。開設状況は表3に示す通りである。市立保育所4園、私立保育園2園、私立幼稚園2園の開設が見られ、ほぼ1年から2年毎の開設である。特徴的なのは、市立保育所を4園開園した点である。既設の保育園や幼稚園のない地区、あるいは第4保育所のように幼稚園の発展解消として市が整備を行ったものもある。

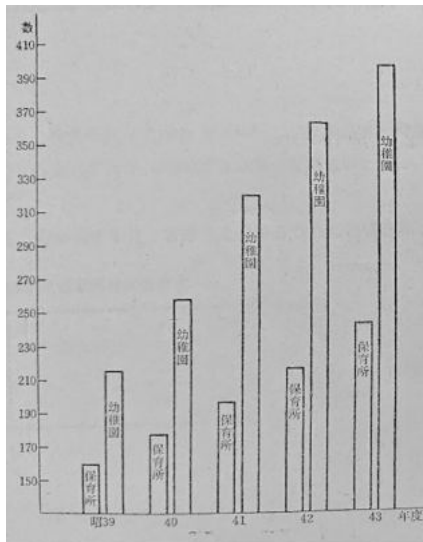
表3 新設幼稚園と保育園

開設年	幼稚園名	場所
昭和38年	市立第3保育所	北2丁目
昭和40年	市立第4保育所	与兵衛新田
昭和41年	建福寺幼稚園	南
昭和43年	市立第5保育所	上岩瀬
昭和44年	いずみ保育園	藤井下組
昭和45年	田口（双葉）幼稚園	上川俣
昭和48年	とねの会保育園	上川俣
昭和48年	市立第6保育所	下新田

この時期、埼玉県内の保育所、幼稚園の増加が著しく見られた。その理由を埼玉県¹²⁾は、保育所

が幼稚園と同じ役割を果たしていること、私立幼稚園の経費が高いことを理由に市町村が保育所を設置したためと分析している。図1は埼玉県が作成した昭和39年(1964)から昭和43年度(1968)の幼稚園と保育園数の推移である。昭和39年に160の保育園数が、昭和43年には244と1.5倍になったことがわかる。

図1 幼稚園と保育所の推移



羽生市内の保育園の開設は、この裏付けにもなっている。公立保育所の新設については、羽生市内では先に私立幼稚園が開設していたため、競争を避けるために保育所を設置した。市立以外では、昭和44年(1969)に増田茂夫が、市街地の東端である藤井下組に、礼儀及び躰を指導し、さらに障害児も積極的に受け入れ、健常児と共に保育を行い相互理解を進める「いずみ保育園」を開設。昭和48年(1971)に増田好文が市西北の上川俣地区に「とねの会保育園」を開設し、「家のために汗をかけ、友のために涙を流せ、社会のためには血を流そう」を合い言葉に、職員全員で素直で元気な子どもの育成に取り組み始めた。

このように多くの保育園が開設されたが、幼稚園の開園は2園のみである。昭和41年(1966)に建福寺第25世住職の安野正雄が、太平洋戦争前に同所にあった「羽生幼稚園」の復興として、施設設備等を一新して「建福寺幼稚園」を再開した。教育方針は、仏陀のみ教え「感謝報恩」を保育の根本理連とし、園児がお互いにかけがえのない存在として助け合い尊敬し合う教育を行った。昭和45年(1970)には、上川俣地区に元教員の田口秋江が地区住民の要望に応じて「田口幼稚園」

を開設した。開設当時上川俣地区には幼稚園も保育園も存在せず、入園するには羽生市内の中心部に行かなければならなかった。要望に応じて最初は少人数を預かっていたが、やがて園児数も多くなり、園舎や運動場、遊具も揃え、幼稚園の体裁を整えていった。県の認可を申請しなかったが、教員には有資格者を揃えていた。この話は田口秋江のご息女から伺った話である。また昭和57~58年(1982・1983)ごろ在籍していた関口さんは、年長・年中組が存在した。園舎内では折紙やハーモニカを吹き、屋外ではかけっこや遊具で遊んだ。お弁当を持参し、午前・午後と幼稚園で過ごした。運動会は小須賀の市営グラウンドで行ったと当時の楽しかった様子を語ってくれた。その後、近隣に前述した「とねの会保育園」が開園したが、幼稚園と保育園の棲み分けをしていたようである。その後田口幼稚園は、平成8年(1996)その歴史に幕を閉じた。

昭和48年(1971)に「とねの会保育園」開設後の幼稚園・保育園の新規開設は、昭和51年(1976)4月に下岩瀬に開設された市立第7保育所と平成30年(2018)5月に曙ブレーキ工業が、事業所内保育所「あけぼの保育園」を開園したのみである。

V 幼稚園・保育園の閉園

昭和40年代まで、多くの幼稚園や保育所が開設されたが、やがて園児数不足や経営者の事情等で閉園する園もあった。昭和40年(1965)に二葉幼稚園が新設の市立第4保育所に引き継ぐ形で、昭和43年(1968)には北小学校前の田口幼稚園が、昭和63年(1988)には羽生幼稚園(内田錦子)が閉園した。平成に入ると8年(1996)に田口幼稚園(上川俣・双葉幼稚園と改称)、21年(2009)に高田幼稚園が閉園し、平成23年(2011)には市立第3保育所が閉園、平成25年(2013)からは市立第5保育所が休園している。図2は直近14年間の羽生市内の保育園児と幼稚園児の数を表したものである。

図2 保育園児・幼稚園児数の推移

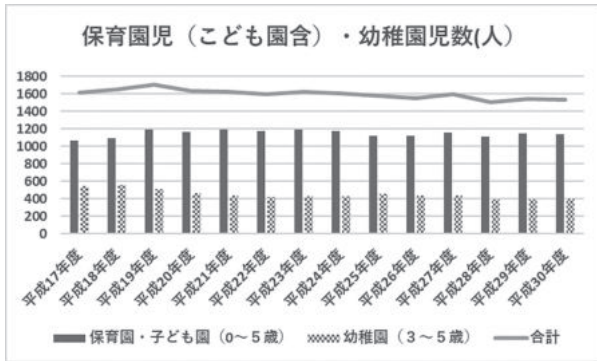


図2より近年は保育園及び幼稚園在籍者数がやや減少傾向にあることがわかる。保育園及び認定こども園（平成29年以降誕生）での0歳から5歳まで在籍数と幼稚園における3歳から5歳までの在籍数の経年変化を見ても、特に顕著な傾向は見られないが、全体的にゆるやかな少子化傾向が見られ、園閉鎖の一因と考えられる。

VI 現在の幼稚園・保育園

1. 認定こども園の誕生

平成18年（2006）から、従来の保育園、幼稚園に加えて、保育園と幼稚園の両方の良さを併せ持ち、保育・教育を一体的におこなう施設として新しく「認定こども園」が誕生した。誕生の背景には、共働きの家庭の増加に伴い保育園の入園希望者が増加する一方で、専業主婦の家庭が減り幼稚園入園希望者が減少したことがある。そこで保育園や幼稚園の既存施設の有効活用と効率的な運営で、待機児童の解消をも目指すこととなった。認定こども園には①幼稚園と保育園の両方の機能を併せ持つタイプの「保幼連携型」、②既存の幼稚園に、保育園の機能が追加されたタイプの「幼稚園型」、③既存の認可保育園に、幼稚園の機能が追加されたタイプの「保育園型」、④既存の認可外の幼稚園や保育園などに、認定こども園の機能が追加されたタイプの「地方裁量型」の4タイプがある。羽生市内では、木村保育園が平成28年（2016）に保幼連携型の「きむら認定こども園」を、翌29年（2017）にとねの会保育園が、同じく保幼連携型の「とねの会こども園」を開設した。令和2年（2020）には、金久保幼稚園が保幼連携型の「かなくぼこども園キラリ」を、建福寺幼稚園が幼稚園型の「認定こども園建福寺幼稚園」を開設した。羽生市内には、それぞれの保育目標に基づいて、保育園、幼稚園、こども園が混在する状況だが、子ども数の減少や女性の社会進出など時代の変化に伴い、今後どのように進むのかを注視したい。

園」を開設した。羽生市内には、それぞれの保育目標に基づいて、保育園、幼稚園、こども園が混在する状況だが、子ども数の減少や女性の社会進出など時代の変化に伴い、今後どのように進むのかを注視したい。

2. 現在の羽生市内の保育施設

現在の羽生市内の保育施設は、表4に示すとおりである。市内各地区に公立保育所から私立保育園、幼稚園、認定こども園とほぼまんべんなく設置されている。羽生市では、第2期羽生市子ども・子育て支援事業計画（令和2～6年度）において「育つ楽しみ・育てる喜び みんなで共有できるまち羽生」を基本理念として各種の子育て支援策を講じている。

表4 羽生市内 保育園・幼稚園・認定こども園

保育園・幼稚園・認定こども園	開設日	西暦	所在地	備考
第1保育所	昭和32年4月1日	1957年	中央1-3-23	
第3保育所	昭和38年3月1日	1963年	北2-5-22	
第4保育所	昭和40年4月1日	1965年	与兵衛新田119	
第6保育所	昭和48年5月1日	1973年	下新田113	
第7保育所	昭和51年4月1日	1976年	下岩瀬731-2	
増子幼稚園	昭和27年10月5日	1952年	東2-4-41	
かなくぼこども園キラリ	昭和28年1月	1953年	北狄島430-1	令和2年4月こども園
須影保育園	昭和30年5月1日	1955年	須影757	
きむら認定こども園	昭和31年4月1日	1956年	上手子林76-3	平成28年4月こども園
春山幼稚園	昭和34年4月1日	1959年	稲子37-1	
認定こども園建福寺幼稚園	昭和41年3月18日	1966年	南1-3-12	令和2年4月こども園
いずみ保育園	昭和44年5月1日	1969年	藤井下組1013-1	
とねの会こども園	昭和48年4月1日	1971年	上川俣87	平成29年4月こども園

その中で、すべての子育て家庭への支援体制整備として（1）市立保育所・私立保育園・幼稚園・認定こども園の充実（2）幼児期の学校教育・保育の一体的提供及び推進を上げている。それぞれの園で学ぶ誰もが平等に支援を受けることができる体制が整備されている。本学は、羽生市内唯一の高等機関として、多くの教員が市内小学校の巡回相談や、市の就学支援に関わっているが、それらの活動を通して、保育園や幼稚園、認定こども園から小学校への接続は極めて順調に行われていることが確認できる。今後も各保育施設の一層の充実を望むところである。

VII まとめ

今回の調査研究を通して、羽生市内の幼児教育とりわけ幼稚園・保育園の歴史についてほぼ明らかにすることができた。戦前の私立羽生幼稚園から始まり、戦後は、私立幼稚園や公立の保育所、私立保育園と開園されていったが、どれもが地域

の要望に応じての開園であった。最初は認可外の小規模な園が大きくなって認可施設になったり、認可申請はしなかったが地区の幼児教育を担い、やがて閉園した園もあった。現存する園も閉園した園もそれぞれの教育目標・保育目標に向かい全力で幼児教育に力を注いでいたことが確認できた。少子化や教育制度・保育制度の変化に伴い、先行きが不透明ことも多いが、それぞれの園が創意工夫を行い、羽生市内の幼児教育を充実させていきたい。また本学の教育に携わる者として、学生に対し、幼稚園教諭あるいは保育士としての知識や技能を身につけさせ、幼児教育者として現場に立った際に力を発揮できるように指導を行う所存である。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、御指導・御助言を賜り、また貴重な資料を御貸与いただきました、羽生市教育委員会生涯学習部長寺崎和代様、生涯学習課高島邦仁様、羽生市郷土資料館宝満様、北小学校小峰校長様、数多くの情報をいただきました和田百貨店社長和田眞司様を始め多くの方にお礼を申し上げます。また、聞き取り調査に御協力いただきました皆様を次に記し御礼といたします。建福寺住職安野様、東町小野田様、東町田口様、喜右エ門新田塩原様、上川俣関口様、加須市野本様、東京都沖田様、中央内田様、中央入江様、栃金様、三幣様ほかの皆様。

引用文献・注釈

- 1) 柳八重. 羽生町誌. 羽生町役場・羽生商工会. 1934, 4. p.77-74
- 2) 平井厚志. 大正期の加須尋常高等小学校と加須町立託児所及び加須町立幼稚園の連携に関する一考察. 埼玉純真短期大学研究論文集 第12号. 2019, 3. p.74
- 3) 羽生市役所. 「羽生市史 下巻」. 1975, 2. p.760-761
- 4) 木村泰夫. 太平洋戦争期教育公文書収録. 埼玉県図書館協会, 1973, 11. p.15-16
- 5) 羽生市役所. 「羽生市史 下巻」. 1975, 2.

p.699-701

- 6) 羽生町役場. 「町勢要覧 昭和28年度版」, 1953, 5. p.13-14
- 7) 羽生市役所. 「羽生市史 下巻」. 1975, 2. p.941
- 8) 服部克巳. 「昭和あれこれ そのとき羽生は」. 1988, 8. p.55
- 9) 羽生市役所. 「羽生市史 下巻」. 1975, 2. p.902
- 10) 埼玉県私立幼稚園協会. 「20周年記念誌」, 1971, 9. p.209-211
- 11) 埼玉県保育史編纂委員会. 埼玉県保育所総覧. 埼玉県保育協議会, 1982, 3. p.26
- 12) 埼玉県文書学事課. 「埼玉県の私立幼稚園」. 1968, 9. p.14

